豊明希望チャペル礼拝

2025/6/8

「健康であるように祈っています」

Ⅲヨハネ 1～8

先週、エクアドル宣教師、ジム・エリオット先生の奥様のことに触れました。O 兄が、カナダでウィクリフ(聖書翻訳の宣教師)の学びをされていたときに、召された 5 人の宣教師を描いた映画を見られたことを話していただけました。

こういう未開の地に遣わされる宣教師は、言葉も通じないときから未開の地に遣わされるウィクリフの働きが多いので、そうなのかなと、改めて確かめて下さいました。ウィクリフではないが、関係の深い宣教団体であって、兄弟の知り合いの方も、ご夫妻と面識があるとお聞きました。

今日の箇所で、この手紙が、ガイオという名の、ヨハネと非常に親しい同労者であって、伝道者？であるか、兄弟姉妹？であって、彼がヨハネにとって、とても愛すべき人で、彼の真実な働きをとても賞賛しているところですが、特に「1:5・・・兄弟たちのための、それもよそから来た人たちのための働きを忠実に行っています。」と、言って、おそらく当時、旅をしながら伝道しているパウロのような人を指していたとも言われている、1 箇所の牧会ではなくて、遣わされるところで宣教をする、教会にとっては、いわば一期一会の交わりの中でさえ、交わりと献金によって支えようとする、宣教師をケアし、遣わす仕事として語られることもある箇所です。とりわけ、7 節で、「1:7 彼らは御名のために、異邦人からは何も受けずに出て行ったのです。1:8 私たちはこのような人々を受け入れるべきです。そうすれば、私たちは真理のために働く同労者となれます。」と、おそらくは、異邦人伝道につかわされ、そこに向かっている宣教師を教会が、支援し、そのことは、まさに、直接、宣教の現場に私たちがたずさわらなかったとしても、「わたしたちは、真理のためには働く(彼ら宣教師の)同労者となれます。」そういう関わり方、資金援助と交わりを通して、その働きに参与することが出来ると言っているのは、そういう宣教師を支え、支援することではなかったかとも言われるわけです。

実際、私は、以前、ある宣教師夫妻を遣わすにあたって、この箇所から語らせていただいたことがあります(1994 年 12 月の礼拝で)。福永有・貴恵宣

教師夫妻です。彼は、パプアニーギニアに遣わされる予定でした。

福永先生は、北海道大学を出られて、夫人と共に、おもに、現地のウィクリフの宣教師の、子女教育を担うために遣わされる宣教師夫妻で、1995 年パプアニューギニア着任いたしました。2012 年以降は、日本ベースでアジア地区の子女教育に従事しておられます。先生に、遣わされるにあたって、何かプレゼントしたいのですがと申し出ると、ナイフが欲しいと言われるです。ウィクリフの宣教の訓練所で、ナイフの扱い方の訓練を受けるんだという事だったのです。私は、そのナイフをプレゼントする事にしましたが、私がその時思ったことは、ああ、毒蛇にかまれるか、猛獣に食われて、本当に、帰って来られないかもしれないこともあるかも・・と、ナイフ一本で身を守り、生きるところに行かれるのだと、ウィクリフの宣教師の覚悟、使命感を実感として感じたのでありました。

今日の箇所は、ヨハネが、ガイオという同じクリスチャンに送っている、愛と励ましに満ちた手紙で、今も触れましたように、特に、彼の、主の宣教のために働く、働き人を支える働きが、クリスチャンとして、同じクリスチャンを支え、とりわけ、御名、すなわち神のため、イエス・キリストのために働く働き人に、直接なれなくても、これを支える働きを、とりあげて、ほめ、また励ましている箇所であります。

まず、このヨハネの第 3 の手紙は、この言葉からはじまります。

「私はあなたを本当に愛しています。」と。第Ⅱの手紙に引き続いて、「愛しています」と語り、さらに、2 節で重ねて、「愛するガイオ」と「愛している」を繰り返します。

「1:1 長老から、愛するガイオへ。私はあなたを本当に愛しています。」そして、「1:2　愛する者よ。あなたのたましいが幸いを得ているように、あなたがすべての点で幸いを得、また健康であるように祈ります。」と。

2 節の「たましい」は心を指し、あえて「たましい」と分けて、健康であるようにと語り、「たましい」(こころ)と共に、肉体にわざわざ言及します。「この健康も支えられるよう」にとあいさつを送るのです。

「健康も支えられるように。」という言葉の中に、特別の親しさを感じさせるのですが、パウロが、若き伝道者テモテの体を思いやって、「あなたに度々起きる病気のために、少量のブドウ酒を用いなさい」（Ⅰテモテ 5：23 当時はほかに十分な薬はないので）と言ったときに、テモテが虚弱な体質であったのではないかとも言われるのですが、そうであれば、このガイオにも、体に問題があったのかもしれません。

「健康のこと」このことにもう少し考えたいと思います。私たちクリスチャンは、病が癒されるように、たびたび祈ります。天地万物をつくってくださった神様は、私たちの体をも造ってくださった方ですから、神様は、当然、魂の問題ばかりではなくて、この肉体の問題も解決することがお出来になると信じ、知っているからです。イエス様は、罪を赦すと同時に、福音書を見ると、いつも、この肉の体の病を癒されました。だから、私たちは、何でも祈りなさいという主のすすめに従って、病の癒されること、健康の支えられることを、おおいに祈ります。

ただ、深読みすると、健康のために特に祈っているのは、ガイオに健康上の問題が、やはりテモテに予想されるようにあったのではないかということです。このガイオという人は、非のうちどころのない人だったとヨハネはあえて強調する、「1:3 兄弟たちがやって来ては、あなたが真理に歩んでいることを証ししてくれるので、私は大いに喜んでいます。実際、あなたは真理のうちに歩んでいます。」あたりのところは、うがったみかたをすれば、これは、霊的にはまったく問題がない人であるのに、健康的には、弱かった、祈られなければならない状態であったということなのかもしれません。

考えてみれば、健康に問題をかかえた弟子達が聖書の中では、触れられていることに気づきます。テモテもそうでしたでしょう、そして、何よりもあのパウロがそうでした。Ⅱコリントで、彼は肉体に一つのとげが与えられたと言います。目の病だったかもしれません。彼は、そのために、特別な祈りを３度も実行したのですが、癒されなかったと言います。なぜ、癒されないのか、パウロへの神の答えは、「私の恵みは、あなたにとって十分である。むしろ、あなたのその弱さの中に、恵みが完全に現れるのだ。」とおっしゃった。（12：9）と彼は言います。そして、その弱さを受け入れたのです。

病気の人は、何でもかんでも、悪霊につかれているのだと言って、たとえば、悪霊払いをしようとするというような考えがないではありません。あるいは、それで、癒されないと、不信仰だというのは、この世の他の宗教などにもみられます。人間が創造されたとき、原罪の問題から言えば、健康でないことは罪の結果です。だから、天国では、罪が贖われなくなると同時に、病気もなくなります。しかし、この世での、個別の健康の問題は、たしかに、個人の不摂生ということもありますが、その全てが、仏教などの言う因果応報的な、その人個人の特有の罪から来ているという事は絶対にないのだと思います。

むしろ、癒されるという事よりも、病気である、障害があるという事を通して、パウロがそうであったように、いかに、多くの神様のご栄光があらわされてきたか、そうです、三浦綾子さんしかり、星野富弘さんしかりです。むしろ、その方が多いのではないでしょうか。そこらへんの所を、間違えないようにしておきたいと思います。

また、ヨハネは、健康に限らず、こういう言い方をしています。「すべての点で幸いを得、また健康であるように」「すべての点で」と。すべての点というのは、生活全般にわたってということです。神の恵みは、衣食住をはじめ、人間関係や、職場の仕事の問題、さらには、子育てに至るまで、すべてを網羅するのです。神様が恵みを下せない範囲というのは、ありません。神の御手が短すぎるということはないのです。どこのどの所にも神様は、御手をのばして解決することが出来る方であることを、あらためて、確認し、信じたいと思います。

あなたに、祈っていない、祈ることをあきらめている分野というようなものが、あったりしたら、どうか、そこに気づいて、あきらめたり、こんな事を祈るのは馬鹿馬鹿しいとか考えないように、親戚にも友人にも言えないような事だからこそ、神様には、どんなことでも祈って、すべての点で幸いを下さる神さまから解決を得て欲しいと思います。さて、前後してしまいましたが、ガイオが、「1:3 真理に歩んでいること」そして、4 節でも「真理に鮎でいることを聞く以上の喜びはない」と繰り返しますが、前回、私たちは、愛に歩むという事と、真理に歩むという事とは、同じことの裏表のように、重んじなければならないと教えられたのですが、今一度、その点に、ヨハネは心を配って教えています。

ヨハネの手紙をみると、真理に歩むとは、肉体をとって来られた神の子イエス・キリストを知り、この方に信頼して歩むことです。この方を、愛して歩む事です。そして、このキリストのうちに歩むという事が、兄弟愛という形ではっきりと現されなければなりませんと繰り返しています。最初に触れた、とりわけ、このことです。

「1:5 愛する者よ。あなたは、兄弟たちのための、それもよそから来た人たちのための働きを忠実に行っています。」

同労者、伝道者で、とりわけ、異邦人のところに遣わされて旅している働き人は、教会の牧師と違って、生活的に見かえりがないと言いますか、支えられることが難しいことは容易に想像が付きます。そのような人を、ガイオは快く迎えて、金銭的、身の回りの物質的なことを含めて、最善の配慮をしたということだと思います。そしてそれをほめています。クリスチャンの愛の特徴は、旅人のもてなしだと言われることがあります。それは、今の時代と違う感覚です。今の時代であれば、旅人は、また帰って来ます。しかし、当時は、旅人と言えば、帰らないかもしれない、まさに一期一会の関わりだと考えられていました。ですから、旅人をもてなすとは、アガペーの愛をなす、一方的でかえりみがなくても愛する施しであり愛で、それは、まさに神の愛の本質、だから、「クリスチャンは、旅人をもてなす事を、その本分とする。」と言われたのです。クリスチャンの合言葉としたいと思うのです。

さて、最後に、私たちも旅人なんだと思います。救われて、永遠の命を戴いて、天の国に入る時までこの世を旅します。この世は、本当の家ではありません。家は天にあります。私たちは旅の途上にあるのです。ヨハネがそうであったように、神こそが、その途上にある歩みにも、気を配り、配慮し、休ませ導いてくださるのだと知るのです。どうせ、天国に来るのだから、旅はどうでもいいだろう、刹那的な楽しみなど我慢しなさい、苦しみなど耐えなさいとは言われない、この途上の、一時の事にしか過ぎない、この健康の事にさえ、仕事や、楽しみにさえ、私たちに、このように祈ることが許されている、そのことを今日は教えられたのだと思います。愛の人。本当に、旅人をもてなす精神を持った人として、証の歩みを、愛の歩みを、今週、ここから出て行きたいのです。真に「りっぱなことです。」といわれる歩みを、今週も送りたいのです。